

ケーベル先生と古典

"You must read Latin at least."の意味

第 21 回ラテン語の夕べ

2011 年 3 月 12 日 山下大吾



1

Raphael Koeber (1848-1923) : ドイツ系ロシア人としてヴォルガ河畔の都市ニージニイ・ノーヴゴロド(Нижний Новгород) に生まれる²。父親グスタフは帝政ロシアの少なくとも 4 等官以上の高官³で、世襲貴族の特権を有していた。1867 年、父の意に反してモスクワ音楽院に入学。ニコライ・ルビンシテイン、チャイコフスキーなどに師事し、その楽才から「二年目からは授業料を免除された⁴」。1872 年音楽院を優等の成績で卒業するものの、生来の内気な性格が音楽家に向いていないことを自覚し、学術研究を志す。イエーナ大学入学当初自然科学を志向したが間もなく哲学に転向、後ハイデルベルク大学に転じ、クーノー・フィッシャーの下でショーペンハウエルの研究を進め学位を得る。その後ミュンヘンで著述に勤しむ中、1893 年帝国大学（後の東京帝国大学）の哲学教授に招聘された。以来 1914 年退官するまで一度も離日することなく、哲学や美学などの正規の授業のほか、契約外ではあったが、ギリシア・ラテンの古典やドイツ古典文学などを課外授業として教授し、幾多の俊秀を育てた。その間東京音楽学校や東京外国語学校などでも教壇に立つ。同年ヨーロッパへの帰国を志すが、折から勃発した世界大戦のため断念⁵、横浜のロシア総領事館に寄寓を余儀なくされる。1923 年 6 月 14 日、同地にて逝去。

¹ 『ケーベル先生追悼号』(1923) より複写転載。1910 年当時の姿。

² 彼の生年月日は、管見の限りではいずれの資料でも 1848 年 1 月 15 日となっている。しかしこれは当時のロシアで行われていた旧暦（ユリウス暦）による可能性も考えられ、その場合現在一般的であるグレゴリオ暦による日付では同年 1 月 27 日となる。また公式記録などでは姓が von Koeber となっている。

³ 外川 (2003:103) 参照。帝政ロシアでは、1722 年ピョートル大帝が制定した 14 等級からなる官等表に従って、数度の改定を経ながら、文官武官を問わず殆ど全ての官職に対し等級が与えられていた。その中でも 1 等官から 4 等官までは сановник 「お偉いさん」と呼ばれるほどの特権的な身分であった。

⁴ 久保 (1951:27)

⁵ この間の事情は漱石の筆になる「ケーベル先生の告別」および「戦争から来た行違い」に詳しい。

1. その出自をめぐって

私の祖国はロシアとなつてはいるけれども、私はそれをロシアと呼ぶことはできない。それはドイツ、—ロシアにおけるドイツである—いや更に正しくいえばドイツであった。…私の今日ある所以のものおよび今日有するところのものは、一つとしてドイツとドイツ人とに負わざるはない。一筋の繊維に至るまで私の自我は永久にドイツおよびその文化と結びついている。…ロシアの学校は私に一物をも与えなかった。私は登校することも不規則で、ろくに学びもせず、それもきわめて不承々々であった、そうして卒業期を待たないで学校を去った。しかのみならず常にドイツ人、『他国人』とみなされていた。みんなは本当には私を好まなかった。そして私を避けた。これじつに悲しむべき生活であった!…上来記したところによって貴君は、私が私の知り来るロシアをばドイツと呼べること、また私のドイツを愛すること、ドイツに対して現在も将来も忠信であるということ、もはや不思議とは思わないであろう!⁶

久保 (1957:23-25)

1.1. 「露語教師」ケーベルの選考過程⁷

明治 37 年に日露が開戦すると、ロシア語の専門的な翻訳技術者、並びに通訳の養成が急務となった。その過程で東京外国語学校のロシア語教師としてケーベルに白羽の矢が立つことになったが、実のところ彼がその時点で、日本側から見て「最も安全なる候補者」であることが、その選定の最大の理由であった。

当時の外国語学校では、それまで授業を担当していたロシア人が祖国ロシアとの開戦という事態に直面し、自身の立場を危うく見て帰国を申し出ていた。そのロシア人のみならず、当時日本に滞在していたロシア人が総じて、同様の行為に及んだことは言うまでもない。その結果、その存在がこれ以上欠かせないという喫緊の時期に、外国人教師のポストに欠員が生じるという非常事態に陥ってしまったのである。更にその選定に際しても細心の注意を払わざるを得ない状況に追い込まれたが、「露国人」たるケーベルが、最終的な候補者として浮かび上がってくるようになった。

他のロシア人が大抵帰国する一方で日本に留まり、また上述の経緯もあり日本側でも在留を許可する中、「ロシアに対しては何の感情もない、かえってここにいる方がいいのだ⁸」と漏らした彼であったが、この依頼を受けたその折、胸中に去来した感情はどのようなものであったろう。そもそもこの件自体、ケーベルの最も嫌悪した政治的事情、さらにその最悪の段階である戦争と

⁶ 久保 (1957:23-25)。本稿では書名、引用文の原文などが旧字旧かなの場合、原則として新字新かなに置き換えた。またふりがな、ルビ、欧文の和訳などは適宜削除、あるいは括弧に入れて示した。『ケーベル博士小品集』（『続』、『続々』、文庫版『随筆集』を含む）の場合、特殊な句読点は適宜「、」及び「。」に置き換え、傍点による強調箇所は枠囲みで示した。引用文中にある下線は山下による。

⁷ 資料 2 参照。

⁸ 和辻 (1962:24)

いう状況から要請されたものである⁹。しかしながらそれは、ほかならぬ彼自身の「世界的（コスモポリチック）な¹⁰」、高貴な人格が招いたものであり、運命の皮肉と言わざるを得ない。しかもことはこれだけに収まるものではない。

内なる故郷のドイツを自らの祖国と終生公言し、更にはヨーロッパ的人間¹¹の故郷たるギリシア・ラテンの古典的世界を志向するようになったケーベルだが、そのような傾向をとるに至った原因の大部分は、もちろん彼自身の性格に帰すべきものであるかもしれない。しかし常に他人から「外国人」として見られる環境、ドイツ人でありながらロシアに生を受けたという事実も、その傾向に対する拍車の役割を果たしたことはやはり否定できないであろう。その結果形成された「区々たる場所を超越した世界的の観念¹²」、「国土を超越した愛¹³」に基づく高貴な人格が我が国日本で「利用」され、こともあろうに戦争と、しかもその人格の形成を、たとえ否定的な形であれ確実に促した場所に相違ない、彼が「この世に生れ出たところの一片の土地¹⁴」であるロシアとの戦争と結びつけられてしまったのである。

されども斯る時期に際して露語教師に露国人を入るゝは頗る注意を要するが故に彼は撰定に苦しむ折柄、露国人ロツウイツキー氏は我校の教師たらんことを希望し熱心に就職の運動を試みしが、其前身は陸軍の大佐なると且疑訝すべき点なきにもあらざりしを以て断然之を拒絶し、最も安全なる候補者を選定し遂に大学教師ケーベル氏に露語教授を嘱託することとし、¹⁵

2. その人となり、人物評

⁹ 深田、久保 (1919:217-218): 政治や戦争を論議することも是れ亦私の好まない所である、この方面の事情は私には殆ど分らないからである。…私は他の何者よりも自分一個の独立不羈と静平とを愛する人間である、そして総じて戦争と政治的生活ほど私の嫌忌するものはない。:久保 (1951:149-150): ある日夕食後に、私が例の如く先生の肩や背中を揉んでいた時、戦争とその意義が私達二人の間話題に上った。先生はこう言われるのであった、『こんなに大きな犠牲を払ったこの戦争で人類が本心に立還って自分自身のうちに沈潜し、深く自省するようになるというのが、私の希望でまた念願なのだ。そこに私は神の摂理を認めたい。戦争を教育者と見る者だけが戦争と和解することが出来る。』実際先生にとっては勝利が何れの側に帰するかというようなことは別に本質的な問題ではなかったのである。（ただしここで話題になっている戦争とは、彼のヨーロッパ帰国を阻んだ最大の原因である第一次世界大戦のことを指す：山下註記）

¹⁰ 久保 (1951:47)

¹¹ 深田、久保 (1919:98): 唯一人私の昔の先生で又友人である作曲家チャイコフスキー丈には、此所謂『遊覧旅行』（日本への渡航：山下註記）がどうしても腑に落ち様としないのであった。彼は次の様な事を書いて寄来した。私の如くに純然たる欧州人の権化とも云うべき者、而かも已に可なりの年齢に達して居る者は、東洋に行つて居心地の好い筈は決して無い、そして懐郷病は私を不幸ならしめるであろう。— 懐郷病! 何所に併し一体私の故郷があるのか。—

¹² 漱石『ケーベル先生の告別』より。夏目 (1994:512)

¹³ 大正九年五月十一日付ケーベル宛有島武郎書簡より。有島 (1985:196)

¹⁴ 久保 (1957:23)

¹⁵ 野中 (2008:445)。同書に掲載された明治39年刊『校友会雑誌』所収「明治三十七八年戦役中に於ける本校の状況」より引用。なお東京外国語学校の後身は現在の東京外国語大学である。東京外国語学校における彼の教え子としては殆どその記録が見当たらない。わずかに「日露漁業会社に勤めていた、お気に入りのY君」や岩崎直砥氏が認められる程度である。久保 (1951:112)、木村 (1982:183) 参照。

先生の生活はそつと煤烟の巷に棄てられた希臘の彫刻に血が通い出した様なものである。雑鬧の中に己れを動かして如何にも静かである。先生の踏む靴の底には敷石を嚙む鋏の響がない。先生は紀元前の半島の人の如くに、しなやかな革で作ったサンダルを穿いて音なく電車の傍を歩いている。…文科大学へ行って、此所で一番人格の高い教授は誰だと聞いたら、百人の学生が九十人迄は、数ある日本の教授の名を口にする前に、まずフォンケーベルと答えるだろう。斯程に多くの学生から尊敬される先生は、日本の学生に対して終始渝らざる興味を抱いて、十八年の長い間哲学の講義を続けている。先生が疾くに索寞たる日本を去るべくして、未だに去らないのは、実に此愛すべき学生あるが為である。 漱石『ケーベル先生』¹⁶

私は今不思議の魅力を有した先生の人格の秘密を探求しようとも啓示しようともする者ではない。然し先生には学者とか君子とか有徳の士とかいうような屈窮な型を超越して広いのびのびとした處があつたことは誰しも感附かずには居られなかつた。今私の感じ得た所が正しいならば、先生にとっては生其ものが芸術であり自己の人格自己の個性其ものが極めて尊き神聖なる芸術品であつたのである¹⁷。先生が教養に重きを置き自らも深き広き豊かなる教養をそなえられたのもその為めである。 波多野精一「追懷」¹⁸

3. ケーベルの下で学んだ主な人々¹⁹

漱石、上田敏、西田幾多郎、岩元禎、桑木巖翼、姉崎正治、波多野精一、深田康算、石原謙、阿部次郎、田辺元、安倍能成、魚住影雄、岩下壮一、九鬼周造、和辻哲郎、田中秀央、久保勉

4. ケーベルの教育方針：古典語、並びに人文主義的教養、人間的教養（humanitas）の重視、定説や自身の思い込みにとらわれることのない、原典尊重の姿勢

先生が我国に来られた頃、痛く我国の学風の軽佻浮薄なるを嫌っておられたように思う。或時私が先生を訪問してアウグスチンの著書の現代語に訳せられたものがないかと尋ねたら、先生は仏蘭西語に訳せられたのがある、しかしなぜお前は羅匈語を勉強せないかといわれた。私は日本の学生が希臘や羅匈の語を学ぶことの困難なることを答えたら、古典語を知らずして西洋

¹⁶ 夏目 (1994:464-466)

¹⁷ 深田、久保 (1919:140): カントの生活は一種の英雄的牧歌的芸術品であつた。多くの人が一種の芸術品なりと做すところの一それは当然であるが—かのゲーテの生活よりも更に一層偉大なる芸術品である。

¹⁸ 『ケーベル先生追悼号』(1923:12-13)

¹⁹ 下線は後に京都帝国大学文学部（大正八年以前は文科大学）に招かれた人々を示す。なお桑木と和辻はその後東大に転じた。また漱石は朝日入社前、当時京都帝国大学文科大学長であつた旧友の狩野亨吉から、新設の英文科教授就任を要請されている。漱石はその要請を断り、その上で新たに採用されたのが上田敏であつた。『京都大学文学部五十年史』(1956:235) 参照。その他に彼の教えを受けた者として、東京音楽学校における音楽家で歌人の橘糸重などがいる。

哲学を理解しようとする考の軽佻なることを説かれ、お前の同級の某君は希臘語を読むではないか、You must read Latin at least. といわれた。また或時私が生意気にもヘーゲルの哲学について反駁がましいことをいったら、Warum? Warum? といって攻めつけられた。そして屢 non multa sed multum といつて戒められた。これらの語はいずれも私のためにいわれたものではあるが、当時の日本の学生一般に対して有っておられた先生の考と思う。

西田幾多郎「ケーベル先生の追懐」²⁰

…人文主義的教養（フマニスティッシェ・ビルドゥング）は、学生のために、将来における自由にして独立なる学術的活動に到る路を開拓するところの、かつ日本人をして恐らくはまた精神的にも我らに比肩するに至らしむるところの唯一の手段である。…余の観るところに従えばギリシャおよびラテンの語学ならびにその文学と文化との研究は、ぜひ現在以上の努力をもってなされ、その期間は更に一層延長せられかつ哲学科と文学科とのすべての学生に対して必修科目とせらるゝを要するものである。²¹ 久保（1957:194）

私のショーペンハウアーに対するや毫も予め成心を抱いて自己流の解釈を下すようなことなく（貴君は恐らくそうしたと思うかも知れないが）、一たゞ彼をありのままに読んだままである、私は彼をばひとり自分の眼をもって読んだ、そうして、幸にも、最初から彼その人を読み、いずれかの『近世哲学史』の中の『厭世主義』と題せられたる章においてショーペンハウアー論を読むことをしなかった。— 久保（1957:128）

5. ケーベルの述べる古典語教育の利点、並びにラテン語、ギリシア語観

ホラティウスの詩を先生と読んでいた時のことである。先生は私にこんな感想を語られた、『母国語では吾々はあまりぞんざいに読む嫌いがある。だから幾多のことを看過しがちである。そうしてそれを他に説明しなければならなくなると、それが一体どういう意味であるか、自分でもよく分からないというようなことが往々あるものだ。私は私自身をも除外しない。ところが古代語ではそうは行かない、そこでは一層大なる緊張が要求される。吾々は遥にもっと注意深く又ゆつくりと読む。そこで吾々は物事を綿密に観察するとか、論理的に考えるとか（特にラテン語では）歴史的乃至心理的に解明するとか—これはつまり解釈の仕事に外ならないが—

²⁰ 上田（1996:68）。同内容の叙述が同じ西田の筆になる「明治二十四、五年頃の東京文科大学選科」に見られる。上田（1996:31）参照。

²¹ 「文科大学長に答うる書」より。「いかにすれば、わが哲学科の学制に僅少の変更かまたはむしろ附加を施すことによって、その学問的精神を高め、かつ必ずや学生を悩ますに相違ないところの二三の悪弊を除去しうるか」という問いに対してケーベルが答えたもの。平成23年現在、京都大学文学部において、西洋文献文化学系の各専修ではラテン語が必修となっている（スラブ語学スラブ文学のみギリシア語との選択制）。一方西田幾多郎が教授として在任した講座に由来する哲学専修、いわゆる「純哲」では、平成20年度以降、少なくともその必修科目の名称から、ラテン語、およびギリシア語が消滅した。

う精神の鍛錬を知らず識らずの間に絶えず受けることが出来るのだ。』 久保 (1951:150)

先生とオデュッセイヤを読んでいた時のことである。先生はその中から少し朗読して言われた、『ギリシャ語はラテン語に比べて、何という美しい言葉だろう！ギリシャ文では一語一語が一つの像（ビルト）だ。ラテン語は実のところ貧弱なそして色合のにぶい言葉だが²²、たゞ文章論（シュンタクス）においては非常に優れている。』 久保 (1951:154)

6. 実現しなかった京都転居

ウィルム氏の許に寄寓すること既に四年にも及んだ終戦少し前のことである。ロシアでは革命が起り、帝政は倒れて労農政府の世となった時、帝政時代の官吏であったウィルム氏の地位も風前の燈のような不安極まるものとなり、氏の胸中は暗雲に鎖されていた。それで先生は氏に対し深い同情を寄せられると同時に、なおいつまでも氏の厄介になっていられるか分らないと思われたらしく、或る日のこと私にはじめてこう言われるのであった—『この秋のうちに京都へ出かけて見たい、そしてもし出来ることなら、あちらへ引越してしまおうかと思う。その事について一つ深田に手紙を書いて見ないか』と。 久保 (1951:133)

7. ケーベルゆかりのラテン語の引用、箴言

Festina lente 「ゆっくり急げ」 久保 (1951:108) 他

卒業後直ちに父母にそのこと（西洋古典語を日本人として初めて専攻すること：山下註記）を打電し、その足でケーベル先生を訪ねて御礼をのべたら、小生のせつかちを学生時代に十分に知っておられた先生から*Festina lente*をもらった²³。 菅原他 (2005:98)

Non multa sed multum / Multum, non multa 「広からねど深く」 久保 (1957:91) 他

Habes plura etiam fortasse quam requirebas; unum tamen omisi. Non enim dixi quae legenda arbitrarer: quamquam dixi, cum dicerem quae scribenda. Tu memineris sui cuiusque generis auctores diligenter eligere. Aiunt

²² このような見解は当の古典時代から優勢であつたらしい。それに対しキケローは以下のように述べている。（『善と悪の究極について』1:10）

Ita sentio et saepe disserui, Latinam linguam non modo non inopem, ut vulgo putarent, sed locupletiolem etiam esse quam Graecam.

ラテン語は、巷で考えられているほど貧弱な言語ではないし、それどころかギリシア語と比べてさえむしろ豊かな言語であると私は考え、しばしばそう主張してきた。（キケロー選集永田訳）

²³ 資料1参照。柳沼 (2000; 2003:171) ではこの句の出典やそれにまつわる興味深いエピソードが述べられている。

enim multum legendum esse, non multa.

小プリニウス『書簡集』7.9.15

おそらく、私はあなたが求めていた以上のことを書いたと思います。しかし、一つだけ書き忘れていました。なぜなら、私が何を必読書と考えているかを、告げていなかったのですから。もっとも、何を書くべきかをあなたに述べたとき、暗示しました。どの様式の文学作品にせよ、それを代表する作家を真剣に選ぶということを、肝に銘じておいてください。よく言われるように、ある一人の作家を深く読むべきであり、たくさんの作家を広く漁って読む必要はありません。

(講談社学術文庫国原訳)

LECTURES
ON
HISTORY OF PHILOSOPHY
BY
DR. R. VON KOEBER.

I. THE GREEK PHILOSOPHY.
INTRODUCTION.

I have exposed in my introduction the whole occidental philosophy and the principal problems and I have explained nearly all philosophical terms. This knowledge which, I suppose, you have acquainted, enables you to study philosophy in details. I don't mean that you have to read only the exposition of philosophical doctrines. That is, of course, necessary too; but it is not enough at all. You must read the original works themselves; and when the language is an obstacle to you, you must remove this difficulty by studying the respective tongue, and as long as you are not master of it, you must read its translation and compare it with good expositions. I recommend you to read every time with a pencil in your hand, and to make *excerptions* and *your own expositions*.

Non multa sea multum—not many but much—must be your maxim, when you study. In every science it is to be observed, but particularly in philosophy which

(2)

has no multa, but only one,—the truth and only one organ—the *pure, disinterested reflection*. Memory makes a man *learned*; reflection—and, of course, a good ideal phantasy—makes him *philosopher*. Do never hope to supply reflection with memory. I have remarked that the Japanese have a perfect memory; it is a very useful and agreeable quality, you must cultivate it; but at the same time, and still more, philosophical reasoning and patience in your study. These qualities *together* will, I am sure lead you to a good result in your philosophical studies.

I will complete, in this term firstly certain chapters of Greek philosophy. I begin with *Platon* now.

24

Docendo discimus 「教えることによって我々は学ぶ」

久保 (1951:35)

Homines, dum docent, discunt.

セネカ『倫理書簡集』7.8

人は教える間、学んでいる²⁵。

²⁴ Koeber (1894-1897: v. 1, 1-2)より複写転載。西洋哲学を学ぶ際の心構えとして、原典を重視すること、原典の言語の習得に努め、不慣れである場合翻訳に拠り、良種の注釈書と対照することを説く。更に読書の際、書き抜きと各自自身による注釈との作成を薦め、まとめの言葉として上記箴言が引かれている。

²⁵ 「山びこ通信」2009年11月号、山下太郎先生の筆になる「巻頭文」を参照。

Semper tiro! 「常に初心者」

久保 (1951:142)

Bonus vir semper tiro.

ゲーテ『箴言と省察』ヘッカー 283

「りっぱな男は、いつも初年兵の気持を失わぬ²⁶。」

(大山定一訳)

Cum grano salis 「斟酌して」

久保 (1951:145)

In sanctuariis Mithridatis, maximi regis, devicti Cn. Pompeius invenit in peculiari commentario ipsius manu compositionem antidoti e II nucibus siccis, item ficis totidem et rutae foliis XX simul tritis, addito salis grano; ei quo hoc ieiunus sumat nullum venenum nociturum illo die.

大プリニウス『博物誌』23.149

偉大なミトリダテス王が征服されたとき、グナエウス・ポンペイウスは王の私室で私用の手帳を発見したが、その中に王自身の手記になる解毒剤の処方があった。干しクルミ二個、イチジク二個そしてヘンルーダの葉二〇枚に塩一つまみを加えていっしょに搗き潰したものを、絶食して飲んだ者はその日一日すべての毒から安全であろう、と。

(中野定雄ほか訳)

Quandoque bonus dormitat Homerus

久保 (1957:147)

Indignor quandoque bonus dormitat Homerus.

ホラーティウス『詩論』359

(ところが、) すぐれたホメーロスが居眠りするときは、わたしは腹を立てる。

(岩波文庫岡訳)

8. むすびに : aemulatio 「創造的模倣」の exemplum 「模範」としてのラテン語とその継承

²⁶ この箴言の意味するところは、ケーベルの「学問や芸術においても極めて謙虚であり、恰も新兵のように、いつ迄も小心翼翼たる初心者の心がけを忘れず、決して慢心を起こすような事なく常に新しく学ぶことを怠ら」ない姿勢を指し、またそうした態度を心がけるべきという意と見てよい。久保 (1951:142) 参照。ゲーテもこのような意味で捉え、特にラテン語で記したと考えられる。しかしこの箴言の典拠となるべきマルティアーリスの詩ではそのような「良心的な」意味ではなく、マルティアーリスらしい、多分に毒のあるものとなっている。ちなみにケーベルのマルティアーリス評は「年若い読者や婦人に勧めるべきものではなかろう。」久保 (1924:152) 参照。

Tam saepe nostrum decipi Fabullinum,
miraris, Aule? semper homo bonus tiro est.

マルティアーリス『寸鉄詩集』12.51

われらがファブッリーヌスのあんなにしょっちゅう騙されるのに、
驚いているのかい、アウルスよ。お人よしはいつまでたってもひよっこってことさ。

Graecia capta ferum victorem cepit et artes

intulit agresti Latio

ホラーティウス²⁷『書簡詩集』2.1.156-157

捕われたギリシアは荒々しい勝者を捕らえた、さらに諸々の術を田野たるラティウムにもたらしたのだ。

vos exemplaria Graeca

nocturna versate manu, versate diurna²⁸.

idem 『詩論』 268-269

あなたがたは、夜であれ昼であれギリシアの手本を手にとって学ぶように。（岩波文庫岡訳）

Exegi monumentum aere perennius

regalique situ pyramidum altius

.....

dicar, qua violens obstrepit Aufidus

et qua pauper aquae Daunus agrestium

regnavit populorum, ex humili potens

princeps Aeolium carmen ad Italos

deduxisse modos.

idem 『詩集』 3.30.1-2, 10-14²⁹

私は打ち建てた、青銅より永く耐える記念碑を、王の朽ちゆくピラミッドより高きものを。…
私は言われるであろう、アウフィドゥスの流れが激しく音を立てるところ、また水に乏しいダ
ウヌスが田野の民を治めたところで、貧しき身より、力強くも、初めてアイオリスの詩歌をイ
ータリアの調べに移し終えた者と。

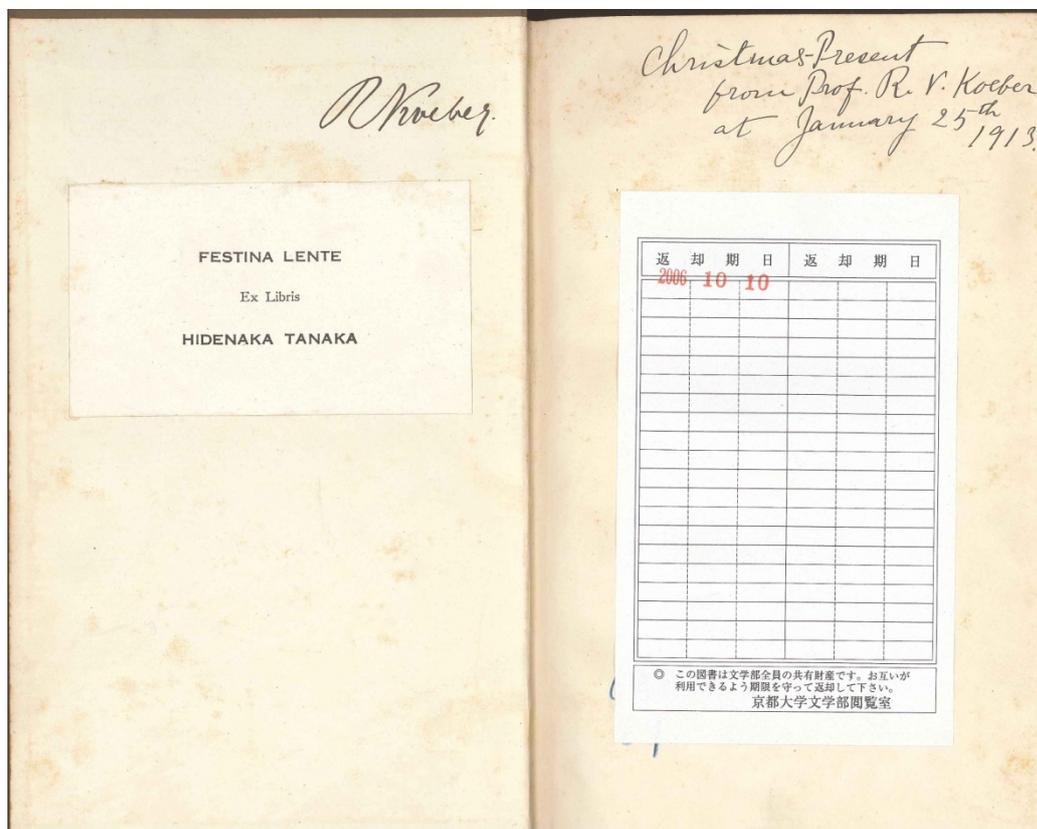
²⁷ 久保 (1957:31): ローマの詩人の中で私の最も好きなのは、そしていつまでも好きなのは、ホラティウスである。

²⁸ Quæris quemadmodum in secessu, quo iam diu frueris, putem te studere oportere. Utile in primis, et multi præcipiunt, vel ex Graeco in Latinum vel ex Latino vertere in Graecum. Quo genere exercitationis proprietas splendorque verborum, copia figurarum, vis explicandi, præterea imitatione optimorum similia inveniendi facultas paratur; simul quæ legentem fefellissent, transferentem fugere non possunt. Intellegentia ex hoc et iudicium acquiritur.
小プリニウス『書簡集』7.9.1-3

あなたは、すでに長く楽しんで暮らしている田舎の別荘で、どのような勉強が必要かと、私の考えを尋ねています。第一に有益な方法は、しかも多くの先人が教えているように、ギリシア語文をラテン語文へ、あるいはラテン語文をギリシア語文へ翻訳することです。この類の練習からは、適格な語法、豊富な語彙、多くの文彩、論旨を展開させる能力、その上に最高の作家の模倣によって類似の文章を創作する能力が養われます。それと同時に、読んでいるとつい見逃すものも、翻訳していると決して見落とさないものです。この修練で、理解力と判断力が、次第に身につきます。（講談社学術文庫国原訳）

²⁹ ロシアの詩人プーシキンは決闘に倒れる前年の1836年、この詩の冒頭 Exegi monumentum を題辭に掲げ、Я памятник себе воздвиг нерукотворный「私は自らに人技ならぬ記念碑を打ち建てた」の句で始まる、上掲ホラティウスの本歌取りによる自身の遺言とも言える詩を残した。

資料 1



京都大学大学院文学研究科図書館田中秀央文庫所蔵Handbuch der lateinischen Stilistik von Reinhold Klotz; herausgegeben von Richard Klotz. Leipzig: B.G. Teubner, 1874 表見返し。そのサインが示すように、元来はケーベルの蔵書であったが、クリスマスプレゼントとして1913年田中氏に譲られたことが分かる³⁰。氏の座右の銘であったFestina lenteを配した蔵書票が張られている。文学研究科図書館では、当文庫の他にもケーベルのサインの記された本が若干数認められる。また附属図書館には、ケーベルがヨーロッパへの帰国を目指し東京を離れる際に譲渡された蔵書が収められているという³¹。

³⁰ 菅原他 (2005:136): 先生からはよく書物もいただいた。先生はよい本は時々二冊求められて、その一冊を下さった。(A catalogue of the Koeber collection (1943) に同書は見当たらない。この書物の内容から見て、西洋古典語を専攻している氏に対して、あるいは特別に譲られたものかと推察される：山下註記)

³¹ 久保 (1951:96-97) 参照。

参考文献

- 有島武郎 (1985) 『有島武郎全集』第十四巻 筑摩書房
- 深田康算、久保勉共訳 (1919) 『ケーベル博士小品集』岩波書店
- 『ケーベル博士記念号』(1963) 「パイディア」No.4 同志社大学教育学会
- 『ケーベル先生追悼号』(1923) 「思想」第二十三号八月号 岩波書店
- 木村浩 (1982) 「ケーベル博士とロシア」 『プーシキンのデスマスク』:180-185 小沢書店
- 久保勉訳 (1923) 『ケーベル博士続小品集』岩波書店
- 訳 (1924) 『ケーベル博士続々小品集』岩波書店
- (1951) 『ケーベル先生とともに』岩波書店
- 訳編 (1957) 『ケーベル博士随筆集』岩波書店 1999年第43刷
- 『京都大学文学部五十年史』(1956) 京都大学文学部
- 松平千秋 (1993) 「ケーベル先生、ヘクトーのことなど」 「図書」532号:40-43 岩波書店
- 中村健之介監修 (2007) 『宣教師ニコライの全日記』教文館
- 夏目金之助 (1994) 『漱石全集』第十二巻 岩波書店
- 野中正孝編著 (2008) 『東京外国語学校史：外国語を学んだ人たち』不二出版
- 澤田和彦 (2003) 『近代日露文化交渉史の諸問題に関する実証的研究』埼玉大学
- 菅原憲二、飯塚一幸、西山伸編 (2005) 『田中秀央近代西洋学の黎明—『憶い出の記』を中心に』京都大学
学術出版会
- 高橋英夫 (1984) 『偉大なる暗闇：師岩元禎と弟子たち』新潮社
- (1990) 「ケーベル歌曲集を聴いて」 「図書」496号:9-11 岩波書店
- 外川継男 (2003) 「ドイツ系ロシア人としてのケーベル先生」『異郷に生きる：来日ロシア人の足跡Ⅱ』:97-107
成文社
- 『東京外国語学校一覽：從明治卅七年至明治卅八年』(1904) 東京外国語学校
- 上田閑照編 (1996) 『西田幾多郎随筆集』岩波書店 2000年第4刷
- 魚住影雄 (1977) 『折蘆書簡集』岩波書店
- 和辻哲郎 (1962) 「ケーベル先生」 『和辻哲郎全集』第六巻:1-39 岩波書店
- 柳沼重剛 (2000) 「Festina lente」 「図書」609号:26-29 岩波書店
- 編 (2003) 『ギリシア・ローマ名言集』 岩波書店
- A catalogue of the Koeber collection* (1943) Tohoku Imperial University Library (『ケーベル文庫目録』)
- Иванова, Г.Д. (1993) *Русские в Японии XIX-начала XX в.* Москва (イワノワ『19世紀から20世紀初頭にかけて日本に滞在したロシア人』モスクワ)
- Koeber, Raphael (1918-1925) *Kleine Schriften*. Bd. 1, Neue Folge, Bd. 3. Tokyo; Berlin
- (1894-1897) *Lectures on history of philosophy*. v. 1-2. Tokyo